

育てベンチャー脚本練る

「日本経済再生の一翼担いたい」

ベンチャー企業などに投資するファンド(投資基金)が日本経済再生の担い手として注目されている。企業経営の経験に乏しい起業家に、カネだけでなく人材も取引先も提供し成長を後押しする手法を米シリコンバレーから持ち込んだ。本家が情報技術(IT)不況に苦しむなか、ここ数年国内で台頭した「物言っ出資者」の力量が試される。||文中敬称略

不振企業の

社長に就任

二〇〇〇年十一月、独立系ベンチャーキャピタルロジベンチャーパートナーズ(NTVP、東京・文京)代表の村口和孝(43)を、投資先のシノックス(東京・千代田)の社長、篠田巨司(当時)が思い詰めた表情で訪ねてきた。「弊社社長を引き受けてくれませんか。リストラが必要な

え、猶予は一刻も許されな
い。「自ら創業した会社を
自分の手でリストラするの
は難しいだろう」。村口は
リリーフ投手役に取り出す
ことにした。

新社長に就任した村口は
データセンター事業から即
座に撤退し、電子メール配
信ソフトやシステム開発な
ど得意分野に集中する方針
を打ち出した。四カ月にわ
たる奮闘の末、経営を立て
直すめどをつけて社長職を
内部の役員に譲った。

大手術が必要なのはシノ
ックスだけでなかった。二
十社弱の投資先のうち、約
半数の取締役が就任して直
接経営支援してきた村口は
IT関連分野の急速な変調
を肌で感じ取っていた。
「今、事業基盤を抜本的に
組み立て直さないと危な

い」。村口はすべての投資
先に事業モデルを根幹から
見直すよう促し始めた。
村口がリスクを恐れず投
資先企業に踏み込んでいく
裏にはVCの本場、米国シ
リコンバレーでの原体験が
ある。

慶応大学の学生だった一
九八二年、共産主義の崩壊
は遠くないと感じ、いずれ
日本も資本主義の原点に立
ち戻って起業家を助ける仕
事が重要になると考えた。
当時、国内でVCという職
業を知る人は少なく、証券
会社の子会社など一部が少
額出資を細々と手がけてい
た程度だった。

「ともかく本場のシリコ
ンバレーに行って自分の目
で見るといい」。村口は
八四年二月、事前に約束も
取り付けずシリコンバレー

の街道沿いに並ぶVCの扉
を片っ端からたたいて回っ
た。その時、村口を開眼さ
せたのはある米国人VC投
資家の言葉だった。「VC
に必要なのは人間を理解す
ること、これだけだ」

「それなら自分にもでき
る」。目の前に立ちただか
っていた霧が晴れたような
思いだった。もともと村口
は大学で演劇の演出を手が
けていた。「人間の理解な
ら自分が一貫してやってき
たことだ」との信念を得て
帰国した。

村口がリスクに立ち向か
うのは、自分自身がファン
ドの出資者から信頼されて
預かった資金を運用してい
るという責任感も影響して
いる。九八年にジャフコか
ら独立した後、あえて劇場
製作所の堀場雅夫会長など
経営の難しさを知り尽くし
たベテラン経営者や起業家
から資金を集めた。厳しい
目に囲まれることこそが自
分の甘えを断ち切ることに
つながると考えたのだ。

IT分野への投資に集中
する村口にとって二〇〇一
年は逆風続きだった。村口
は定期的に開くファンド出
資者総会で投資先企業に対
する新施策について説明し
た際、出資者から突きつけ
られた質問が忘れられな
い。

あるベテラン経営者がた
だひと言、「その判断に迷
いはないか」と射抜くよう
に尋ねた。迫力に気押され
ながらも村口は「ありませ
ん」と応じた。「それなら
良い」。その経営者は上手

にまとめた事業計画を聞き
たいのではなく、村口が自
信を持って決断したかを確
認したかったのだ。
実現性の薄い計画でも追
い風に乗って船をこぎ出せ
たネット株バブル時と違
い、ベンチャー各社は今、
引き潮にほんろうさされて
いる。顧客を満足させられ
資金が尽きて波間に消える
ベンチャーが増える中、周
囲の信頼にこたえてきた起
業家や資金の担い手たちだ
けが次の目標を目指して船
を進めようとしている。

日本テクノロジ
ベンチャーパートナーズ代表 村口 和孝氏

